フッサールの実存的現象学（1933 年）

堀　栄造

序　言

エドムント・フッサール（1859～1938）は、1920 年代半ばから 1930 年代半ばへかけての最晩年の約 10 年間に「実存的現象学」を展開した。本論は、フッサールの書簡およびフッサリアーナ（フッサール全集）第 42 巻[1]所収のフッサールの草稿に基づいて、1933 年時点のフッサールの実存的現象学を解明しようとするものである。

（一）職業官吏再建法下のフッサールの実存

1933 年 4 月 7 日、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）政権下のドイツにおいて、職業官吏再建法［der Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums］が制定された。この法律は、非アーリア人（非純血ドイツ人）としてのユダヤ人を公務員から追放する趣旨の条項を含むものである。したがって、この法律は、ユダヤ系ドイツ人としてのフッサールおよびその家族や親族には、大打撃を与えるものとなった。

フッサール夫妻がフライブルク時代のフッサールの弟子であるアメリカ人のドリオン・ケアンズ[2]の妻へ宛てた 1933 年 5 月 20 日付けの書簡の中で、フッサールの妻であるマルヴィーネ・フッサールは、次のように書いている。「……そうこうしているうちに、当方では、あまり良い状況とは言えません。ドイツの諸事情がどんなに暗澹たるものであるかを、あなたは、新聞できっとご存じの事と思います。私は、それに関して何ら詳細に書くことはできませんが、それは、まさに革命［Revolution］です。……[3]」。こうしたフッサール夫人の文面から、職業官吏再建法下のドイツの暗澹たる状況を窺い知ることができるとともに、その状況が「革命」と呼ばれるほどにフッサール夫人にとって大打撃であったことが分かる。

また、同書簡の中で、フッサール自身は、次のように書いている。「……私たちは、それゆえ、私たちの息子や娘（あるいは、その夫）もまた、新法の言う意味での〈非アーリア人（非純血ドイツ人）〉として困難な状況に見舞われています。私たちの生の

きわめて致命的な運命的打撃［der verhängnisvollste Schicksalsschlag unseres Lebens］、そして、私たちの将来全体に革命をもたらすもの！……数ヶ月来、研究が停滞しています。フィンク博士の助手としての給料も削除され、私は、彼を、あと数ヶ月間しか置いておくことができません。……どうぞ、あなたの手紙の中で、いかなる政治的価値判断も、書かないで下さい。通信は、監視されます[4]」。こうしたフッサール自身の文面から、職業官吏再建法下のフッサールが、当局による通信の監視を警戒するほどの切迫した状況に置かれていることを、窺い知ることができる。そして、最晩年のフッサールの研究助手を務めたオイゲン・フィンク[5]への国家からの給料の支給が打ち切られたことも分かる。1933 年 3 月 22 日までフッサールのゲッチンゲン時代の弟子であるアドルフ・グリメ大臣がそのトップにあったプロイセン文部省は、1930 年以降、フッサールの研究助手としてのオイゲン・フィンクに給料を支給していた。1933 年 2 月には、まだ、フッサールは、1933 年度予算についてもフィンクの給料が認可されるという確認を受け取っていた[6]。そうすると、フィンクへの国家からの給料の支給の打ち切りは、やはり職業官吏再建法絡みの影響がフッサールに及んだと考えざるをえない。

フッサールがゲッチンゲン時代の弟子である上掲のアドルフ・グリメ[7]へ宛てた 1933 年 10 月 9 日付けの書簡の中で、フッサールは、次のように書いている。「……（非アーリア人としての）私自身や私の家族は、きわめて社会的政治的大変動［Umwälzung］に見舞われましたが、私は、あなたやあなたの家族の運命をいつも心配していました。……私や私の子供たちの国籍剥奪や他の一切の事は、もちろん私には応えましたし、それは、私の実存の根本［die Wurzeln meiner Existenz］を危うくしました。私自身の一時解雇は、再び取り消されました。私の息子は、何か他の大学での職を〈予定〉されています。私の娘婿は、解雇されませんでした。そうこうしている間に、私は、私の忠実な卓越した助手たちによって支援されながら、全力で再び私のライフワークに着手しました。まもなく、草稿の形での新巻が、仕上がります。私は、長年のものであり今やようやく完熟した私の哲学研究における揺るぎない確信前と同様に確信後も、究極的に妥当する学問的方法の道を予示してしまわなければなりません。それは、消えてなくなることはないでしょう（フィンク博士は、遺稿とその仕上げを学術的に管理するでしょう。）。私は、75 歳であるにもかかわらず、休むことができません。私が、人間的現在［menschliche Gegenwart］とのかかわりなしに完全に思想の世界のうちに生きる場合、私は、役立つ友人としてどうありうるのか？…

… [8]」。フッサールの文面から、職業官吏再建法制定の 4 月からのこの半年間、フッサールおよびその周辺に起きた事に関して、フッサールは、「きわめて社会的政治的大変動［Umwälzung］に見舞われた」と表現している。そして、それは、フッサールによれば、「私の実存の根本［die Wurzeln meiner Existenz］を危うくする」ものであった。フッサールは、1933 年というこの年に、書簡中でも草稿中でも突如として「実存［Existenz］」という語を多用する。それは、フッサールが文字通りに厳しい「現実存在」のうちに置かれて不安や恐怖に苛まれながら「人間や人間の生き方」について命懸けの深遠な思索をせざるをえなくなったことを象徴している。1933 年というこの年の書簡や草稿のうちにこそ、フッサールの「実存的現象学」のクライマックスを見いだしうるものと思われる。「フッサールの実存の根本を危うくする」ものをフッサールの文面に即して具体的に挙げれば、次のようになる。フッサール自身は、バーデンの文化省によって 1933 年 4 月 14 日に一時解雇され、7 月 20 日に一時解雇が取り消された [9]。フッサールの長男ゲルハルト・フッサール [10]は、第一次世界大戦（1914～1918）の前線で戦った兵士であり、新法によれば解職されないはずであるにもかかわらず、1933 年 4 月 25 日に、右翼の教授だとしてキール大学教授を一時解雇された [11]。フッサールの娘婿は、美術館で学芸員を務める公務員で、まだ解雇されてはいないけれども、美術館が統制下に入ればおそらく解雇されるだろうというふうに心配された [12]。最晩年のフッサールの研究助手であるオイゲン・フィンクへの国家からの給料の支給の認可の件でフッサールが世話になったフッサールのゲッチンゲン時代の弟子であるアドルフ・グリメは、1933 年 3 月 22 日にプロイセン文部大臣を辞めさせられて目下求職中であり、フッサールは、グリメに就職口を斡旋したいもののままならない状況にある。こうした実存的状況つまりフッサールやその家族の国籍剥奪を中核とするような実存の根本を危うくする状況の中で、自分の思想の世界と自分の人間的現在とのかかわりに苦悩するフッサールの姿が、浮き彫りになっている。まさにそこにこそ、フッサールの「実存的現象学」のクライマックスを見いだしうるものと思われる。

フッサールのゲッチンゲン時代からフライブルク時代に至るまでフッサールとの親交を持ち続けたフッサールの弟子であるロマン・インガルデン [13]へフッサールが宛てた 1933 年 10 月 11 日付けの書簡の中で、フッサールは、次のように書いている。「……私は、なぜ沈黙していたのでしょうか？あなたは、その事をお分かりでしょう！第三帝国における非アーリア人という運命つまりその内的および外的痛ましさ

は、沈黙の理由としてのいかなる究明をも必要としないでしょう。……私の息子〔フッサールの長男であるゲルハルト・フッサール〕は、ベルリンへ（暫定的に）転居して、そして、ハイデガーがこれからはフライブルクで（ナチスの指導者原理から見て）国家社会主義的な大学学長であり、新帝国における大学変革のリーダーであるかどうかを、そしてそうであることを待望しています。古いドイツの大学は、もはや存在せず、その意味は、今後は〈政治的〉大学です。奇妙な時代。非アーリア人として国籍を剥奪されて、私は、研究しうるのかどうか、生きうるのかどうか？それは、十分に困難でありましたし、とうとう、私は、それを強いられたのでありますし、私は、75 歳であるにもかかわらず、ほとんど年老いた精力の中で再びもう三ヶ月間研究しています。私の遺稿において！未来は、私の遺稿を求めるでしょうし、永遠の相の下での研究は、再び胎動するでしょうし、未来は、何が未来（真正の未来）であるかを評価するでしょう。……あなたは、ドイツ語版『省察』の草稿を、まだ必要としますか？もちろん、絶対に非政治的に、私に返信して下さい。……[14]」。フッサールの文面から、「第三帝国における非アーリア人という運命つまりその内的および外的痛ましさ」を痛切に感じたフッサールは、如何ともし難く、ただ沈黙するしかなく、「非アーリア人として国籍を剥奪されて、私は、研究しうるのかどうか、生きうるのかどうか？」と苦悶するフッサールの「実存性」が、見て取れる。そして、1933 年 4 月 25 日に右翼の教授だとしてキール大学教授を一時解雇されたフッサールの長男であるゲルハルト・フッサールは、フッサールの愛弟子であるハイデガーが国家社会主義的なフライブルク大学学長として新帝国における大学変革のリーダーシップを発揮することを待望しているようであるが、フッサールは、自分の後継者としての期待を裏切り自分とは全く異なる道を歩んで行くハイデガーを許せなかったにちがいない。さらに、フッサールは、当局による通信の監視を警戒しながらも、こうした逆境の中で書き残される自分の遺稿を、未来が歴史的に真正なものとして評価するだろうと述べている。

ここまで、フッサールが弟子たちへ宛てた 1933 年の幾つかの書簡を吟味検討してきたが、フッサールの心情が臆面もなく大胆かつ正直に吐露された書簡は、何と言っても、ハイデガーよりも年長のフッサールのゲッチンゲン時代の弟子であるディートリッヒ・マーンケ [15]へフッサールが宛てた 1933 年 5 月 4 日付けの書簡であろう。その書簡の中で、フッサールは、次のように書いている。「……すでに、昨年の秋以降、私は、私の年老いた気の滅入る状態へ向かう途上にありましたし、そして、政治的展開は、私の心情を鬱陶しくするようにますます影響を及ぼさざるをえませんでした。

遂に、私は、私が決してありうるとはみなさなかったものを、高齢の中で体験せざるをえませんでした。私が決してありうるとはみなさなかったものとは、私が実際に尊重に値するとともに実際に高潔な私の子供たちと共に（そして、その一切の後継者と共に）そのうちへ押し入れられることになるような精神的ゲットー（ユダヤ人強制居住区）のこうした建設です。今後ずっと通用する国家原則によれば、私たちは、私たちをなおドイツ人と呼ぶ権利をもはや持つことにはならなくなりますし、私たちの精神的仕事は、もはやドイツの精神史のうちへ数え入れられることにはならなくなります。〈ユダヤ人〉という烙印を以てこそ、—それというのも、その烙印は、新たな国家意志の全表明によれば、軽蔑視という烙印であることになりますから。—新たな国家意志の全表明は、ドイツ精神がそれに対して用心しなければならないような有害なものとして、根絶されなければならないような有害なものとして、生き続けることになります。……[16]」。ここで、フッサールは、昨年の秋以降にナチ党が次第に台頭して行く政治的展開を憂慮していたのだが、今年の 1 月にナチ党が政権を掌握し 4 月に職業官吏再建法を制定してユダヤ人に対して精神的ゲットーを建設するという急展開までは予想していなかった事を正直に吐露し、ユダヤ人への国を挙げての軽蔑視を真正のドイツ精神にとって有害で根絶されるべきものとして痛烈に批判している。

そして、同書簡において、フッサールは、次のようにも書いている。「……私の弟子や愛する若い友人および協力者は、まさしく、きわめて本質的な事やこうした方法の新たな精神や超越論的還元の意味をそのノエシス - ノエマ的多面性においてそして志向的解明の直観的無限性において理解しませんでしたし、相対的明証の絶対化によってや新たな存在論主義の設立によって新たな哲学の真正な大変革的意味に対して多岐にわたって不正を働きましたし、それによって新たな哲学の真正な大変革的意味を無価値にしました。だから、ただいわゆる改訂や補完や水準の深化から始まって、それは、あらかじめ私の真の現象学によってずっと踏破されました。けれども、人格的友好関係は、一連のこうした弟子たちとの間で維持されました。私は、彼らの哲学的思索を承認することができませんでしたし、彼らは、彼らがもちろんその理解において到達しなかったものをほとんど考えないにもかかわらず、そうなのです（彼らがその理解において到達しなかったのは、大部分は、私の責任においてであり、生成中に不完全に表現される哲学の責任によってなのです。）。しかし、その他の弟子たちとの間では、私は、きわめてもの悲しい人格的経験をしなければなりませんでした。そして、最終的には、ハイデガーとの間で、きわめて困難な人格的経験に遭遇しました。

きわめて困難なと言いますのも、私は、彼の才能のみならず彼の性格に対しても、（私にとって今やそれ自体もはや正当に理解できないものとなった）信頼を置いていたからなのです。［こうしたいわゆる哲学的な心からの友好関係のとんでもない終結は、5 月 1 日に公式に遂行された（全く芝居がかった）ナチ党への入党でした。彼によって遂行された私との交際の断絶が先行し（そして、もはや、彼の任用後まもなくのことです。）、そして、最近は、彼のますます強く表現されるようになる反ユダヤ主義がありましたし、学部では、彼のグループに対抗して、熱狂的なユダヤ人学生も居ました。］それを克服することは、困難な事でした。そして、その際に、ハイデガーの〈実存〉哲学やその他の〈実存〉哲学―その大部分は、私の著作や講義や人格的教えのうちに表明されたカリカチュア（戯画）に基づいて生じるものです。―が、私のライフワークのラディカルな学問的な根本意味を逆転させて、私のライフワークそのものを完全に克服されたものとして大きな賞賛を以て無価値化し、今なお研究するのは無駄であるものとして無価値化したようなやり方を克服することも、該当しました。それもまた、容易ではありませんでした。……[17]」。ここで、フッサールの弟子や愛する若い友人および協力者が、フッサール現象学の本質や方法的精神や方法的意味を理解せず、フッサール哲学の真正な大変革的意味を無価値化したけれども、フッサールは、そうした困難にめげずに改訂や補完や水準の深化によって踏破したことを述べている。そして、とりわけ、フッサールの弟子たちの中でもひときわフッサールが後継者として期待していたハイデガーのフッサールに対する裏切りとも言えるような仕打ちは、フッサールにとって耐え難く辛いものであったにちがいないが、フッサールがそうした哲学的な次元での実存的逆境をも克服したことも、窺い知ることができる。フッサールは、当時のハイデガーの「実存」哲学やその他の「実存」哲学に対して、その大部分はフッサールの思想のカリカチュア（戯画）に基づいて生じるものだと言明しているが、おそらくハイデガーやシェーラーやヤスパース等々の「実存」哲学を念頭に置きながら自己の哲学がそれらとは一線を画すものであることを言いたいのであろう。そして、実際に、フッサールは、1933 年というこの年に、同時代のさまざまな「実存哲学」とは一線を画する自己の固有の「実存的現象学」としての「実存哲学」を明確に打ち出すのである。

さらに、同書簡において、フッサールは、次のようにも書いている。「……しかし、先月や先週にもたらされたことは、私の現存在のきわめて深い根本［die tiefsten Wurzeln meines Daseins］を衰弱させました。一つには、すでに、政治が、私を危険な

人格的危機へ突き落としました。戦争と、観念論および宗教がきわめて卑劣な仕方で戦争手段として利用されたようなやり方に関する私のきわめて博愛の楽観論を揺るがす諸経験は、意識的なきわめて卑劣な中傷の隠れ蓑として、数年間、健康上でも哲学的にも私を後退させていました。私自身が再び私の方法の十分な意味や普遍的な地平をできるかぎり理解してさらに実り豊かに継続しうるようになるまで、私は、実際に数年間を要しました。しかし、今や、私は、もはや数年間を自由に使用することはできませんし、私は、数年間ではなく、少なくとも数週間か数ヶ月間で、次のような事を成し遂げなければなりません。すなわち、無類の多数派において私を排除し捨てたドイツ国民に対して究極的な孤立化を以て妥協するということです。もちろん、それが大した事ではないような年老いた世代の精神的人間の下ではまだしも、しかし、若者の下ではどうなのか？！私を相続することになるあなた方は、どうですか！私は、今や孤独であり、世界や人間の神が与えた意味への私の確固たる信念のうちで孤独です。人間のうちでは、ドイツ国家は、一つの分肢にすぎず、それゆえ、その分肢は、真正や真理をそれ自体で持ち、そのうちでは至る所で神が支配する自己の自由を持つような他の諸分肢の下での分肢として、健全や国家の真理および真正を持ちうるにすぎません。数ある中で、私の哲学的思索もまた、普遍的目的論の肯定的進行に属するのであり、そして、とりわけ、歴史的伝統に基づいてそれを形成するように私を通じてドイツ国民に委ねられたものに属するのであるという確固たる信念のうちでも、私は、孤独です。未来が、次のような判断を、初めて下すでしょう。すなわち、1933 年に真正なドイツの現在とは何であったのかということであり、真正なドイツ人とはどのようなものであったのかということであり、尊敬の念を以て記憶の中に生き続けて偉大なドイツ人から相続する者は、多かれ少なかれ唯物論的神秘的な人種的偏見を持つドイツ人であるのか、あるいは、純粋な物の考え方を持つドイツ人であるのかということです。私は、孤独者であり、確かに、唯一の者としてでもありませんし、全く少数というわけでもない人々の一人としてでもありませんが、多数派は、この場合、まだ、打ち解けて愛し合う国民全体において人間に必然的な自然な共同的生を成すような全体を作り出してはいません。そして、さしあたり、おそらくこの場合に新種のものとして作り出されるであろうような全体は、孤独の中でまさに大きな試練であり、大きな運命です。その運命は、神が恩恵を与えるとすれば、自己自身を人格的に高めることによって、そして、そこから始めて、責任を引き受けることや高次の人間の働きおよび人間の能作の行使によって、克服されなければなりません。私は、

弱くならないでしょう。私は、すでに、内的確実性という恩恵つまり人間の自己理解および世界認識のきわめて深く絶対的な源泉という恩恵を開示し、そしてそこから始めて、崩壊させせられる信念および一般的な地盤喪失のこの十年間に歴史的人間にとりわけ必要であるような体系的な諸々の道を切り開いて障害を除去してしまわなければなりませんでした。数年間経てようやく完全に妥当なものにされるにせよ、その事は、私は言うのですが、今や、戦時中のその当時の心的な苦しみに対する強さとは全く別の強さを私に与えます。そして、私は、永遠の精神的広野において、実際にまもなく再び時代の人格的な脅威を克服しうるものと、確信しています。……もし、私が、あなたのこの前の手紙の後半によればあなたと完全に一致していることを、知らなかったとすれば、私は、これほど詳細に語らなかったことでしょう。……私は、あなたの心からの純粋な物の考え方つまりあなたの生において大いに確証された国民的な物の考え方を知り、物の考え方について絶えず全く同じ物の考え方の持ち主として私の友人を持ったからです。……[18]」。ここで、フッサールは、4 月の職業官吏再建法の制定以降のこの一ヶ月間が「私の現存在のきわめて深い根本を衰弱させた」と述べている。そして、フッサールは、第一次世界大戦（1914〜1918）においても政治によって「危険な人格的危機」へ突き落とされ、その後数年間で自己を立て直したけれども、今回は自己を排除し捨てたドイツ国民に対して究極的な孤立化を以て妥協するしかないことを吐露している。さらに、フッサールは、孤独の中で、世界や人間の神が与えた意味への自己の確固たる信念を持ち、自己の哲学的思索が普遍的目的論の肯定的進行に属するとともに歴史的伝統に基づいてそれを形成するように自己を通じてドイツ国民に委ねられたものに属するという確固たる信念を持っていることを告知している。そうした信念に基づいて、フッサールは、唯物論的神秘的な人種的偏見を持つドイツ人と純粋な物の考え方を持つドイツ人のどちらを未来は真正なドイツ人として判断するかを説いている。世界や人間の神が与えた意味を正当に把握した普遍的目的論の立場を取るフッサールは、打ち解けて愛し合う国民全体において人間に必然的な自然な共同的生を成すような全体を理想国家と考えているが、ナチ党政権下で新種のものとして作り出される国家は、フッサールにとって実存的逆境という意味を持つ「大きな試練」ないし「大きな運命」でしかない。その試練ないし運命を克服するためには、自己自身を人格的に高め、責任を引き受けることや高次の人間の働きおよび人間の能作を行使することによらなければならない。政治的にも経済的にも混乱が続いたドイツのこの十年間つまり信念が崩壊させられ一般的な地盤が喪失させられ

たドイツのこの十年間に対して、とりわけ必要とされるような体系的な諸々の道を切り開いて障害を除去することが、フッサールが自覚したフッサールの使命であった。そして、その道の出発点として開示されるべきものは、「内的確実性」つまり「人間の自己理解および世界認識のきわめて深く絶対的な源泉」としての超越論的主観性である。フッサール現象学によって開示される超越論的主観性は、フッサールにとって、普遍的目的論において神から人間へ授けられる恩恵なのである。超越論的主観性を開示するような体系的な諸々の道を切り開いたフッサール現象学の集大成の著作が、『ヨーロッパの諸学問の危機と超越論的現象学』(通称は『危機書』、1935 年〜1936 年執筆）である。超越論的主観性を開示しようとするフッサールの信念は、時代の人格的脅威を克服する強さをフッサールに与えたものと言える。当局による通信の監視に対するフッサールの警戒心を乗り越えてフッサールにこのような赤裸々な本音を語らせたものは、マーンケがフッサールへ宛てた前回の書簡に綴られたマーンケの心からの純粋な物の考え方つまりフッサールと全く一致する純粋な物の考え方であったにちがいない。

（二）「実存のあり方」の現象学的分析

フッサリアーナ（フッサール全集）第 42 巻所収の草稿 Beilage XLV つまり 1933 年 4 月の職業官吏再建法の制定後一ヶ月を経た 5 月頃に執筆され 6 月により詳しく仕上げられた[19]草稿 Beilage XLV「共同体的生と〈実存〉。自然の脅威による運命性における生。他の人間や動物による脅威における生。実存をめぐる不安、実存全体。[20]」において、フッサールは、前節でフッサールの書簡に基づいて吟味検討したようなフッサールの実存的現在を踏まえた上で、「実存のあり方」の現象学的分析を遂行している。表題を一瞥しただけでも、「自然の脅威による運命性における生」という言葉のうちに、地震や津波といった天変地異を連想させる「自然の脅威による運命性」という言葉にカムフラージュされたナチ党政権下の「歴史的政治的脅威による運命性」が透けて見えるし、「他の人間や動物による脅威」という婉曲的表現のうちに、「唯物論的神秘的な人種的偏見を持つドイツ人による脅威」が込められていることは明白である。「実存をめぐる不安」という言葉は、フッサールの実存的現在の切迫した状況下での哲学的思索つまり実存的現象学の核心的主題であったにちがいない。

その草稿において、フッサールは、次のように述べている。「破産する危険な状態

にある商人は、次のように言う。すなわち、〈私の実存［meine Existenz］〉は、脅かされており、私の自己保存［meine Selbsterhaltung］は、脅かされており、私は、破滅し、私は、私の実存を失い、私は、もはや私を保持することができない、と。しかし、そうした事が、実際に起きようと、或る〈新たな実存〉を基礎づけ、或る新たな〈職業〉に就いてそのうちで自己を保持する可能性が、場合によっては彼に開かれており、それゆえ、或る自己保存へ至る或る新たな仕方が、場合によっては彼に開かれている。彼は、可能性を持っている。……彼は、まだ〈生の希望［Lebenshoffnung］〉を持っており、彼がいかなる形態で〈生きる〉ことができるのか、つまり、自己保存することができるのかということは、生の気遣い［Lebenssorge］のうちにあり、いかなる新たな形態で、彼自身によってつまり彼の意志力によって形成されるべきいかなる形態でそして実践的な職業的生［Berufsleben］の或る熟知された形態へと形成されるべきいかなる形態で、彼が或る新たな実存を基礎づけ進行させることができるかということは、生の気遣いのうちにある。彼は、そのような状況の中で、まだ諸可能性の或る開かれた地平を持っており、しかも、可能化［Vermöglichkeiten］つまり〈実存のあり方［Existenzweisen］〉の多かれ少なかれ規定された可能化や未規定の可能化の或る開かれた地平を持っている [21]」。ここで、フッサールによれば、「私の実存」は、「私の自己保存」を意味する。つまり、実存は、自己保存であり、実存の喪失としての自己保存の喪失は、破産としての破滅である。破産としての破滅を回避する生は、「職業的生」であり、職業的生は、「実存（自己保存）の可能性」を開く生である。実存（自己保存）の可能性は、「生の可能性」であり、「生の希望」であり、「生の気遣い」である。それは、諸可能性の或る開かれた地平を伴う「可能化」であり、規定された可能化や未規定の可能化の或る開かれた地平を伴う「実存のあり方」である。

それでは、フッサールの実存的現象学は、「実存のあり方」をどのように分析するのであろうか。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「通常の生のうちに生きる人間は、しかし、その内部でもちろん充足がどのようにしてなされるのかつまり継続すべき生の保持がどのようにしてなされるのかを絶えず気遣うような通常の生の希望のうちに生きる人間は、すでに十分に基礎づけられた特殊な実存のあり方を持っており、そして、こうした特殊な実存のあり方は、促進されうるし、あるいは、破壊されうる。生の希望は、生の意欲や職業的可能性の生の地平、規則性と偶然性（運命）が入り交じった中での諸活動の類型に関係づけられた諸活動の或る類型における可能性として、挫けることなく依然として存続するのであり、やはり大まか

に統制されており、ひとは経過する環境世界に対して対応しながら態度を取りそして順応しうるというふうに統制されている。反対の場合は、生の希望一般の破棄［Bruch］であり、それとともに、一切の可能な気遣いの廃棄［Aufhebung］であり、そもそも気遣うということが不可能だということである。こうした気遣いの喪失は、完全な希望の喪失であり、自己の肯定性［Positivität］においてまさに希望や気遣いにおける生であるような生の否定性［Negativität］であり、何ものかに向けられる生は、ばらばらな気遣いの生ではなく、可能化［Vermöglichkeit］の連関し合う普遍的な地平における生であり、首尾良く行く能動的な諸獲得の結合の一致へ向けられる。成功は、まさに自己と並行して失敗を持ち、そして、勘違いされた成功は、自己と並行して引き続き明瞭になる実際の失敗を持つ、等々である。気遣いは、活動性の様相化に由来するとともに可能的失敗の地平の絶えざる予示に由来するような感情様態であり、そうした可能的失敗の地平の内部では、やはり予見される確実な成功の路線つまり修正下での成功の路線が経過する[22]」。ここで、フッサールの実存的現象学による分析によれば、実存のあり方は、継続すべき生の保持としての未来の自己充足を絶えず気遣いながら希望のうちに生きるというあり方である。そして、生（実存）の希望は、生の意欲や職業的可能性の生の地平、規則性と偶然性（運命）が入り交じった中での諸活動の類型に関係づけられた諸活動の或る類型における可能性として、挫けることなく存続し、ひとがその環境世界に対応し順応するという形で統制される。さらに、希望や気遣いにおける生は、自己肯定性における生であり、希望の喪失や気遣いの喪失は、自己否定性における生である。したがって、実存（生）の基軸を成す希望や気遣いは、活動性の様相化に基づいて可能的失敗を予示しその修正下での可能的成功を予見しながら首尾良く行く能動的な諸獲得の結合の一致をめざす通常の生（自己肯定性における生）の志向性である、と言える。

それでは、実存（生）の根本的区別とも言うべき「自己肯定性と自己否定性」について、フッサールは、どのように考えているのであろうか？それに関して、フッサールは、次のように述べている。「生や生きうること［Lebenskönnen］という語に或る簡明的確な意味を与える（「どういう状態であるのか？」―「ひとは生きうるのだ！」）ような肯定性における人間的生が、否定性における生からそのように区別される場合、さらなる問いが生じる。さしあたり、なお、区別が熟考されるべきであり、しかも、肯定性における生としての通常の生に対して、熟考されるべきである。例えば、乞食の生は、どうであるのか？おそらくひとは言うだろうが、それは、非人間的生で

あり、屈辱的な生を持つ人間の生である。後者の表現は、一つの価値判断である。しかし、前者の表現は、価値づけの根底に存するものを表現しうるのであり、まさに或る人間的な生のあり方を表現しうるのであるが、簡明的確に言えば、そうした人間的な生のあり方は、人間的ではないと言えよう。ひとは、囚人の生をも引き合いに出しうるのであり、そしてまた、それを非人間的生と呼びうる。……彼（乞食）は、〈寄食者〉となり、物乞いに基づいて或る職業を作る。これもまた、〈職業〉であり、見通せる生存期間を可能にする現存在の秩序づけられた自己保存というあり方でもある。そして、そうは言ってもである。それは、真の生つまり真に人間的な生であるのか？ひとは、そのように言うだろう。こうした判断は、なぜ、〈現実的〉人間的生の否定性としての判断であるのか？囚人についても、同様である。彼が、〈生〉の希望のうちにありうる場合、そのうちで彼が飲食するだけでなく、〈肉体的〉要求を充足するだけでなく、人間的様式を持つ或る作業生の統一において完全な人間として充足されるような或る活動的で統一的な生つまり或る能動的自己保存の生、自己の能作の能動的総合の生を築くという希望のうちにありうる場合、彼は、まだ、人間的肯定性のうちに居る。……その隣人たちに対して影響を及ぼすような悪いあり方を準備した或る共同体における他の人間たちに対して、刑務所は、―それが招かれようが招かれまいが―誰もが巻き込まれうるような運命の形態の一つつまり限界状況［Grenzsituation］の一つを意味するのであり、人間性を喪失させて自己を人間性のうちに維持することができないという最大の危険のうちへ人間をもたらすようなものとして意味するのである。人間が、そのような状況の中で、自分を取り組ませて故意に習熟するであろうような遊びを考え出す場合、自己を遊びによって〈維持し〉、常に再び遊びによって〈維持する〉ことは、或る人間的生だと言えようか？それは、いわば、真の人間的現存のあり方へ至るのではなく、生の充足をしつこくせがんで手に入れるあり方ではないのか？通常の意味でのそしてこうした類比的な意味での乞食の生は、いかなる真正に人間的な生でもない。そうした生は、それを以て或る単に動物的な生へ下落させられるのか？否、或る単に動物的な生ですらない。それは、つまり、〈その生が完全に無価値だという決定〉であるのか？個人という観点からの実存問題の考察。個人は、共同体においてのみ存在する。民族の共同体の実存、諸民族相互の共同体の実存、等々[23]」。ここで、フッサールは、乞食の生や囚人の生を「非人間的生」と呼んでいる。それは、「人間的生の否定性」である。なぜなら、人間的生つまり実存は、肉体的要求の充足としての自己保存つまり見通せる生存期間を可能に

する現存在の秩序づけられた自己保存というあり方だけでなく、人間的様式を持つ或る作業生の統一において完全な人間として充足されるような或る活動的で統一的な生つまり或る能動的自己保存の生というあり方をも不可欠なものとするからである。乞食も囚人も、人間性を喪失させて自己を人間性のうちに維持することができないという最大の危険のうちへ人間をもたらすような「限界状況」であり、誰もが巻き込まれうるような「運命の形態」の一つを意味する。

前節で見たように、1933 年のフッサールの実存的現在においては、フッサール自身およびその周辺の人々の解雇や当局による通信の監視が切迫した実存的状況を如実に示すものであったが、1933 年のフッサールの実存的現象学における乞食や囚人といった限界状況の主題化は、まさにフッサールの実存的現在におけるフッサールの実存的不安に基づく問題意識と直結しているものと言えよう。そして、引用部分の末尾の指摘のように、個人の実存問題の考察から共同体の実存問題の考察への敷衍の必至を説くフッサールの胸のうちには、危機的時代に対峙して「真正な実存」とは何なのかを突き付けようとする哲学者としての矜持があったものと言えよう。

（三）実存的不安と実存的絶望

フッサリアーナ（フッサール全集）第 42 巻所収の草稿 Nr.36 つまり 1933 年 6 月 [24] の草稿 Nr.36「極度の状況―実存つまりのちに重苦しい自暴自棄や無気力になるような実存的不安を可能にする完全な絶望の出現。死の不安という一つの事例。〈世界消失性としての眠ること、世界からの別れとしての死ぬこと〉。[25]」において、フッサールは、前節で吟味検討したような「実存のあり方」における「実存的不安」と「実存的絶望」について考察している。

実存的不安に関して、フッサールは、次のように述べている。「実存的不安［Existenzangst］は、（様相化において）肯定的に生きるしそして常にそのように生きうるという確実性の統一性において、生の肯定性［Lebenspositivitäten］の全体性を措定するのであり、生全体の個別的なものが無関係に存続することはないし、生の全体性において共に意識されるものの個別的なものが無関係に存続することはないし、価値づけのうちに共に存するものの個別的なものが無関係に存続することはないし、過去に関してもそうであり、かつての長い間強烈に享受される幸運はない。しかし、この場合、次のような事が重要である。すなわち、実存的生の肯定性［die Positivität des

Existenzlebens］は、或る特殊な目的形態で経過しうるし、それに属さない他の諸目的や生涯にわたって貫かれる諸目的および生の諸層を未定のままにするが、実存を規定する生の目的の破棄とともに一切の他の共に経過する諸目的が完全に無価値にされるというような価値従属関係においてそうだということである。或る職業的生［Berufsleben］は、多くの目的の中での生であるが、多くの目的は、総合的に統一的に結び付けられており、そして、生全体は、こうした総合的構造における生として、特殊な目的および努力そのものにおいて或る生の目的の統一を意味し、或る意志的生一般の（生全体を包括する生の意志の）統一を意味する、という仕方でそうなのである。或る意志的生一般は、生の目的へ向かい、そして、生の目的としての使命［der Beruf als Lebenszweck］という絶えざる形式で、常に新たに個別的に目標を立ててその目標へ向かって生き、その目標を貫いて新たに立てるべき目標へ向けられ、そして新たな獲得があるというようにずっと継続していくことへ向かう。……主観つまり私であるような自我としての私は、目的を得ようと努め、目的をめざして意欲すること以外に何もできない。しかし、主観が、一般的に或る生をこうした肯定された生の目標の下で実践的に導きうるという可能性に絶望することによって、その意志は、或る実践的意志つまり自然な意味での或る〈私は意志する〉になりえない。したがって、権力への渇望や富への渇望は、或る主観にとって絶対的性格を持つ。その主観は、無条件に権力や富を目的としてめざし、成功して権力を持った生活や富を獲得した生活において自己の生の〈意味〉を自己の〈生の幸福［Lebensglück］〉とみなす。絶望［Verzweiflung］。絶望が心的態度［Gesinnung］である間は、絶望が絶対的な生の意志［der absolute Lebenswille］である間は、それは、いつもは生に価値を与えるようなありとあらゆるものを破壊する。つまり、それは、家族生活の価値や社会生活の価値やその他の価値を与えるようなありとあらゆるものを破壊する。しかし、主観は、或るそのような実存的不安［Existenzangst］や実存的絶望［Existenzverzweiflung］を通り抜ける際に、最終的にはまた、権力への意志や富を獲得しようとする意志としての自己の従来の生の意志の放棄へ至りうる。それは、権力や金等々はいかなる真の絶対的価値でもないという洞察へ至りうるし、そのような目標を得ようと努める無条件性は真の無価値なものの盲目性のうちに存する或る無条件性であったという洞察へ至りうる。その意志そのものは、打ち砕かれ、その意志目標は、否定される。そうした事は、成就が不可能であるということとは全く別の事であり、偶然的な諸障害を克服しうるという信念がだめになるということとは全く別の事である。改心的革新［umkehrende Erneuerng］―

それは、過去の目的生や現在の目的生やその将来の目的生を故意に包含しながらその基盤を奪うので改心的であり、そのような特殊目的やそのような意欲やそのような意志の肯定の中で経過する意志を抹消し、或る新たな生の意志や生全体の或る新たな意志の形式を捉えて実現しようとすることによって改心的である。その主観は、自己の実存［Existenz］を失い、自己が自己自身としてのつまりこうした実存のあり方における存在としての自己の存在をそれとして見いだすような自己の自己保存［Selbsterhaltung］を失う。けれども、まさに自己が或る新たな目的意志において自己の自己存在つまり生きながら実現されるものを見いだすということによって、自己保存は、さらに生起する。それゆえ、真正な絶対的意志方向とその熟慮すべき明証という問題が、存する[26]」。ここで、フッサールは、実存的不安が、（様相化において）肯定的に生きるしそして常にそのように生きうるという確実性の統一性において、生の肯定性の全体性を措定する、と述べている。前節で、実存（自己保存）の可能性は、「生の可能性」であり、「生の希望」であり、「生の気遣い」である、ということを確認したが、「生の気遣い」は、「実存的不安」に他ならず、「生の肯定性の全体性の措定」に他ならない。したがって、フッサールによれば、端的に言って、実存とは、実存的不安であり、生の肯定性の全体性の措定である。そして、生全体は、多くの目的が総合的統一的に結び付けられた総合的構造の下で生全体を包括する生の意志の統一つまり生の目的の統一である。したがって、意志的生一般は、生の目的へ向かい、生の目的としての使命という絶えざる形式で、常に新たに個別的に目標を立ててその目標へ向かって生き、その目標を貫いて新たに立てるべき目標へ向けられ、そして新たな獲得があるというようにずっと継続していくのである。しかし、意志的生は、肯定された生の目的へ向けて生きることができなくなる場合がある。それは、絶望である。絶望は、いつもは生に価値を与えるようなありとあらゆるものを破壊する。しかし、実存は、実存的不安や実存的絶望を通り抜ける際に、権力への意志や富を獲得しようとする意志といった自己の従来の生の意志の放棄へ至りうる。つまり、権力や金等々はいかなる真の絶対的価値でもないという洞察へ至りうるし、そのような目標を得ようと努める無条件性は真の無価値なものの盲目性のうちに存する無条件性であったという洞察へ至りうる。そして、実存は、自己の従来の生の意志に代わる新たな生の意志や生全体の新たな意志の形式を捉えて実現しようとする改心的革新へ至りうる。それゆえ、フッサールは、真正な絶対的意志方向とその熟慮すべき明証という問題を示唆している。

したがって、1933 年時点の実存的現象学において、フッサールは、実存を生の肯定性の全体性の措定としての実存的不安として捉え、生全体を生の意志の統一つまり生の目的の統一として捉えている、と言える。そして、フッサールは、生の意志を実存的不安や実存的絶望の克服たる改心的革新によって真正な絶対的意志方向をめざすものとして捉えている、と言える。

結　語

本論は、第一に、1933 年のフッサールの幾つかの書簡に基づいて、職業官吏再建法下のフッサールの実存的現在におけるリアルな生々しいフッサールの実存を浮き彫りにし、究極的な孤立化に屈することなく超越論的主観性の開示を自己の使命と自覚し哲学者としての信念を貫くフッサールの実存的な生き方を明らかにした（第一節）。第二に、1933 年時点のフッサールの実存的現象学は、実存（生）の基軸を成す希望や気遣いが、活動性の様相化に基づいて可能的失敗を予示しその修正下での可能的成功を予見しながら首尾良く行く能動的な諸獲得の一致をめざす通常の生（自己肯定性における生）の志向性である、と析出していることを、そして、乞食や囚人といった限界状況をどのように分析しているのかを明らかにした（第二節）。第三に、1933 年時点の実存的現象学において、フッサールは、実存を生の肯定性の全体性の措定としての実存的不安として捉え、生全体を生の意志の統一つまり生の目的の統一として捉えていることを、そして、生の意志を実存的不安や実存的絶望の克服たる改心的革新によって真正な絶対的意志方向をめざすものとして捉えていることを明らかにした（第三節）。

注

[1] Husserl, E., Grenzprobleme der Phänomenologie: Texte aus dem Nachlass (1908–1937), hrsg. v. Sowa, R. und Vongehr, T., Husserliana, Bd. XLII, 2014. 以下、Hua. Bd. XLII と略。

[2] ドリオン・ケアンズ（1901～1973）は、アメリカの現象学者で、1924 年～1926 年と 1931 年～1932 年にフッサールの下で研究した。

[3] Husserl, E., Briefwechsel Bd. IV Die Freiburger Schüler, hrsg. v. Schuhmann, K., Husserliana Dokumente, Bd. III, IV, 1994, S. 31. 以下、Briefwechsel IV と略。

[4] Ibid., S. 31f..

[5] オイゲン・フィンク（1905～1975）は、ドイツの哲学者で、1928 年にフッサールの下で博士

号を取得し、1929 年～1938 年にフッサールの研究助手を務めた。
[6] Vgl. Briefwechsel IV, S. 192, Anm. (45).
[7] アドルフ・グリメ（1889～1963）は、ドイツの政治家・宗教社会学者で、1930 年代のフッサールの研究生活を支援した。
[8] Husserl, E., Briefwechsel Bd. III Die Göttinger Schule, hrsg. v. Schuhmann, K., Husserliana Dokumente, Bd. III, III, 1994, S. 97f.. 以下、Briefwechsel III と略。
[9] Vgl. Briefwechsel IV, S. 192, Anm. (44).
[10] ゲルハルト・フッサール（1893～1973）は、ドイツの法哲学者で、1933 年にゲッチンゲン大学教授に就任し、1934 年にフランクフルト大学教授に就任したが、同年に、アメリカへ亡命した。
[11] Vgl. Briefwechsel IV, S. 160, Anm. (126).
[12] Vgl. Briefwechsel III, S. 495 u. Anm. (193).
[13] ロマン・インガルデン（1893～1970）は、ポーランド人の現象学的美学者・哲学者で、1912 年～1914 年および 1916 年～1919 年にフッサールに学び、フッサールの最晩年までフッサールと親交があった。
[14] Briefwechsel III, S. 290f..
[15] ディートリッヒ・マーンケ（1884～1939）は、ドイツの哲学者で、1927 年にマールブルク大学教授に就任した。
[16] Briefwechsel III, S. 491f..
[17] Ibid., S. 492f..
[18] Ibid., S. 493ff..
[19] Vgl. Hua. Bd. XLII, S. 520, Anm. (1).
[20] Ibid., S. 520.
[21] Ibid., S. 520.
[22] Ibid., S. 520f..
[23] Ibid., S. 521ff..
[24] Vgl. ibid., S. 495, Anm. (1).
[25] Ibid., S. 495.
[26] Ibid., S. 495ff..

（ほり・えいぞう　大分工業高等専門学校一般科文系教授）